

第22回日本静脈麻酔学会学術集会 ～若手麻酔科医のおすゝめ～ vol.3

『よくばり教授の頼まれ仕事』

Dr. Y

あるところに、とても欲張りな麻酔科の教授がいました。

どのくらい欲張りかということ、日本語と英語が話せれば十分事足りる環境にあって、ドイツ語、さらにフィン語(?)を習得しようとしたり、医師という本職がありながら、全く関係ない超難関「気象予報士」の資格を取ってみたい、北半球のみならず南半球の日の出と日没時刻まで把握していたり、早朝から遠方まで出かけていって地図にもない「アメダス」を探して茂みをガサゴソと探してみたり、…と列挙してみると、ただの変人との違いがよくわかりませんが、とにかく、昔話に登場する「正直じいさん」の隣に住んでいる「よくばりじいさん」ばりに欲張りなのです。

あるとき、この欲張り教授は、静脈麻酔学会という学会を開くことになりました。

なにしろ欲張りなので、ありきたりなことでは満足しません。せっかく主催するのですから、他では真似できないような会にしたい。訪れた人が思わず息をのむような仕掛けを用意し、一生記憶に残るような印象を与え、あるいはトラウマを刻み付け、後々の語り草になるような大盛況を収めてやりたい。どうしたらいいものかと、無い知恵を絞って考えました。

そこで欲張り教授は、日本中から人脈を駆使して「これぞ」と思うスペシャリストを贅沢に招集することにしました。それも、その演者たちに会場で喧々諤々の討論をさせておいて、それをローマのコロセウムのごとく観戦してやろうという目論みです。火に油、キャンプファイヤーにガソリン、そこへさらに酸素を送り込んで焚きつけて煽り、大炎上を高みの見物。おお、家内安全、火の用心。

さらに、特別ゲストとして、憧れの職業である国際線パイロットに頼み込んで、機長による貴重な基調講演を実現させるなど、まさにやりたい放題です。

その上、この会に一人でも多くの集客を得ようと、自分好みのホームページを作成し、片隅にこのような「紹介文」を載せるべく部下に命じて何通も書かせ（当然のごとく自分好みに修正して）、客寄せの足しにしようというのです。

「素晴らしい学会だ」「面白い!」「最高です!」「私も買いました」「7日で10キロ痩せました」、こういうのをステルスマーケティングといいます。

なにしろまだ開催されてもいないので、面白いかつまらないか、わかりようがありません。書かされる側の身にもなって頂きたい。食べてもいない店の味を批評するような真似がどうして出来ましょうか。

正直者の私に言えることは、とにかくこの教授が欲張りである、というその1点に尽きます。

ただ、もうこの欲張り具合につきましては上記のようにお墨付きでありますからして、マイナーな学会とは言え、というかマイナーな学会であるからこそ、欲張りのプライドにかけて、その欲望のまま、趣向を凝らし粋を極めた欲張りな学会に仕上がるであろうことは、想像に難くありません。

欲張り教授の自慢のコレクションをどれほどのものか、見に行ってみよう、という気分で冷やかしにお越し下さるのも一興かと存じます。

寓話に「欲張りの犬は肉を落とす」と申しますが、この欲張り教授の足元にはいろんな宝が山ほど落ちていそうなので、お土産に一つ二つ持って帰ることも可能だと思います。